

# たてごと

弘前学院大学  
宗教部  
宗教主任  
楊 尚眞

〒036-8577  
弘前市稔町  
13-1

## 命の尊厳と墮胎

宗教主任 楊 尚眞

「人の命は地球より重い」という歴代首相福田赳夫が言った言葉がある。それほど、人の命は何にも代えがたい大切なものであるということである。いじめや虐待などで自死を選んでしまうことは、大きな事件として取り上げられて、その原因となるものを探し出し、加害者は誰であるか、責任の所在を問う。しかし、毎日、静かに殺されて行く小さな命が多くある。それは、墮胎、即ち、人工妊娠中絶という死の出来事である。その責任者となる者は胎児の親である。日本で中絶が合法になっ

たのは、戦後になってからであるが、それまでは刑法212条の「墮胎罪」規定により、犯罪とされてきた。これに対し、一九四八年制定の優生保護法(現・母体保護法)は「暴行もしくは脅迫」など望まぬ妊娠や「経済的理由」に限り、中絶を合法化した。ただし、妊娠周期が22週を越えた場合、胎児は母体外で生存が可能なため法的には認められていない。

日本の中絶は、最新の二〇一五年統計によると、総数は約17万6千件であり、年齢別では20〜24歳が22%で最も多く、30〜34歳の20%が続いている。そして、10代の中絶は、一日、53件である。つまり、未婚の中学生・高校生・大学生の中でも人工中絶手術を受けた生徒や学生が多いのが現実である。また、公に自分の墮胎の経験を語る者はいないのである。それは、当事者たちも墮胎は良いことであるとは思っていない。罪悪感や羞恥心が伴う苦しみの出来事ではないか。

人のいかなる状況や立場においても、人間の小さな命を絶つことは、命の尊厳に関わることである。聖書は、命の尊厳性に関して人類が始まってから語っている。創世記1章26節では神が人間を「神のかたち」に似せて創造されたと言っている。人間が「神のかたち」に似せて創造されたということは人の命の価値と性質は、動物とは異なる次元で造られたということである。神は、「人の血を流す者は、人によって自分の血を流される。人は神にかたどって造られたからだ」(創世記9章6節)と言われた。それほど、人の命は貴重な存在であるということである。人間は命を授けられたから命を失うまで「神のかたち」を秘めた存在であるという点においていかなる時代においてもその存在価値や尊厳性に差異はないのである。

詩編139編13章「あなたは、わたしの内臓を造り、母の胎内にわたしを組み立ててくださった」、また、詩編139編16章では、「胎児であつたわたしをあなたの目に見ておられた。わたしの日々はあなたの書にすべて記されている。まだその一日も造られないうちから」と詩編の記者は言っているが、神は母体の中で生命を養ってくださるお方であるということ、生命の誕生から死に至るまで神の御手をかけて下さっていることである。

現代の多くの国々は、人の命が誕生して最初8週ないし12週が過ぎるまでは、単なる潜在的な人間と見做す。しかし、いかに社会的な合意を通じて規定しても、聖書では生命が生じた瞬間からその小さな命を育まれ死に至るまで御手の中に保たれる存在価値と尊厳性がある存在である。このことから墮胎は最悪のケースを除いて行わるべきではない。

命の尊厳は人間の責任である。ただ、経済的な理由による望まぬ妊娠によつて墮胎が可能な選択は正しい選択であるのか。過去の貧しき時代においても多くの子どもを育ててきた立派な日本の親は多くいる。日本は経済的な理由で子ども育てられないような福祉貧困国ではない。中学や高校における性教育は墮胎を減少

させるためにあるのではない。無残な墮胎による苦悩から身と心を守る貞操教育と正しい性に基づく倫理道徳教育が必要で

あるのではないか。命の尊厳とは自己の体と心を汚すすべての悪から守る健全な精神である。

なく、自分が隣人になれるかが問題だということを描きました。イエス様が祭司とレビ人を悪者にして、サムリア人を善

ばれてしかたがなくローマ人の家庭に福音を伝えるに行ったペトロはイエス様のことをこの人たちに伝えると、自分たちに起きた不思議な現象が同じようにローマ人にも起きたのを見て、彼らを仲間に入れることに納得しました。

はや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」その後、エフェソにいたる信徒に、次の言葉が送られました。「キリストはわたしたちの平

秋の特別礼拝 (二〇一八年十二月十五日)

「隣人とはだれか VS. 隣人になれるか」

東奥義塾高等学校

塾長 コルドウエル・ジョン 先生

「良きサムリア人」のたとえ。聖書物語の人気ランキングを作るとしたら、確実に上位に入るのはこの話です。学校や職場で起きるいじめの構図をよく表している話だという見方ができます。旅人には仲間がいなく、ここにいじめられっ子の姿が見られます。弱みに付け込んだのは盗賊でした。ここにいじめられっ子の

姿が見られます。二人の人が通りかかりますが、知らんぷりするのが一番だと考えます。この二人は、その場に居合わせた普通の人を表しています。しかし、どんな人にも手を差し伸べようとする切りがないと指摘した律法学者はイエス様に尋ねました。「わたしの隣人とはだれですか。」イエス様は誰が隣人かでは

隣人は、損得の計算をせず、相手が自分の助けを受けるのに相応しい人間かどうかを考えないで行動します。初代のクリスチャンたちは皆ユダヤ人で、初めの内はユダヤ人以外の人たちに伝道するつもりはありませんでした。ユダヤ人とその他の民族の間に高くて厚い壁がありました。ローマの軍人に呼

ユダヤ人のクリスチャンたちはこの新しい同志をユダヤ教に改宗させ、外国人がひどく嫌がる割礼という儀式を受けさせ、律法の掟を守らせるべきだと主張する人たちがいました。その時、元迫害者のパウロはイエス様への信仰を持つた外国人クリスチャンがユダヤ教徒以上に輝いているのを見てその動きに反対しました。伝道を始めて間もなく、パウロはガラテヤ地方に住むクリスチャンたちに次の言葉を送りました。「も

和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊しました。十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵



意を滅ぼされました。」  
 「二〇一〇年の秋から私は中国の江西省の南にある贛州という街に就職しました。贛州に着いた次の日曜日に教会を探しに行きました。日本の教会の牧師に書いていただいたいの紹介状を教会の責任者の一人に渡しました。責任者は次の週の日曜日の礼拝説教で、日本の教会から紹介書が届いたことに触れ、さきほど取り上げたパウロの言葉を引用しました。「キリストはわたしたちの平和です。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊しました。かつて、敵国だった日本の教会からこのようなお手紙が届きました。キリストにある兄弟姉妹である私たちの間にあつた敵意の壁も壊されました。ここでは福音が生きている。アジアの国際関係の問題を解決する上で、私たちの信仰が、決して無関係ではな

い。そのような思いが強められ、とても励まされました。  
 わざわざ外国に行かなくても、身近なところに多くの隔ての壁があります。これらの隔ての壁を

礼拝感想文

秋の特別礼拝

「隣人とはだれか VS. 隣人になれるか」

文学部 英語・英米文学科  
 三年 相馬菜奈

今年の秋の特別礼拝では東奥義塾高校の塾長であるコルドウエル・ジョン先生がお話を下さった。奨励の内容は「隣人とは誰かvs.隣人になれるか」であった。キリスト教を学ぶとよく隣人や隣人愛という言葉を目にする。講義でキリスト教の人間関係論について学んだ。その中で、自己を

一つ一つ取り除くのが、福音の役目であり、「平和を作り出すものは幸いです」と言ったイエス様の教えに従う私たちの務めです  
 (文責 柘植秀通)

愛することはどういうことかについてこのように「自己を真に愛することは、自己愛と隣人愛の両方が無くしてはならない。イエスが言われた『隣人を自分のように愛することとは、自己を愛することが出来る人が人を愛することを愛することが出来ない

人は、隣人を愛することができない。」「このことからわかることは、生きていくうえで隣人はとても大切な存在であり、隣人愛を持って生活をする必要があるということである。ただ、ここで私は疑問に思ったことがある。それは本当の隣人愛とは何か、相手にとつての隣人とはどのような人であるかということだ。隣人愛を持つことが大事とはいえ、その本質を理解していないと本当の意味で隣人愛を持っていないように思ったからである。しかし、奨励を聞いてからは隣人、隣人愛の本質やそれらが持つ意味を以前より理解できたように思える。以下で詳しく述べていこうと思う。

聖書物語の一つに「良きサマリア人のたとえ」という話がある。新約聖書の中のルカによる福音書10章25節、37節にある、イエス・キリストが語った隣人愛と永遠の命に関するたとえ話である。この話の内容は以下のとおりである。ある人がエルサレムからエリコに向かう途中で強盗に襲われて身ぐるみをはがされ、半死半生となって道端に倒れていた。そこに3人の人が通りかかる。最初に祭司が通りかかるが、その人を見ると道の向こう側に通り過ぎて行った。次にレビ人が通りかかるが、彼も道の向こう側を通り過ぎて行った。しかし3番目に通りかかったあるサマリア人は、そばに来ると、この半死半生の人を助けた。傷口の治療をして、口ばに乗せて宿屋まで運び介抱した。そして翌日になると宿屋の主人に人が人の世話を頼んでその費用を払った。初めにこの話を聞いたときに道端に倒れている人を見捨てた司祭とレビ人はひどい人たちだと感じた。しかし、奨励の話を聞いて別の解釈があることに気づかされた。2人

に共通することは自分のことに精いっぱいであるということである。本来、助けるべきなのだがそのような行動を起こすことによって自分が不利な立場になってしまう可能性がある。その際に、知らないふりをすることで自分を守る事が出来る。これは、現代の社会で問題となっているいじめと同じように思う。いじめられていた人がいたら、助けたいと思う。しかし、その行動を起こすことによって今度は自分が次のいじめの対象になってしまいかもしれない。したがって、知らないふりをして自分を守る。もし、私がそのような場に出くわしてしまつたらおそろく2人のように知らないふりをしてしまつたろう。このように考えると、ひどい人というよりは人が持つてゐる弱さの表れであるように思う。では、本当の隣人、隣人愛とはなんなのだろうか。

このたとえ話をする前に法律学者はイエスに「私の隣人とは誰ですか。」と尋ねた。その後イエスは「このたとえ話をし、誰が怪我人の隣人になったか。」と聞いた。法律学者は「助けた人です。」と答えた。そしてイエスは「行ってあなたも同じようにしなさい。」と言つた。このことからわかることは、隣人が誰かということではなく困つた人に対して自分に責任があるのかではなく、その時に出会つた自分が隣人になれるかが問題であるということだ。私はこの話を聞いてとても感心した。それぞれの隣人が誰なのかが重要ではなく、自身が誰かの隣人になれるかが重要であることに気づかされた。この時、隣人・隣人愛とは何かということを理解できたように思う。

以上のことから、隣人・隣人愛はどれほど大切であるか。また、自分の責

任に関係なくそのときに出会つた人の隣人になれるかどうかが大切だということがわかつた。正直に言えば、私はまだ自分の責任を考えてしまい誰かの隣人にはなれないだろう。しかし、このたと

え話の教訓を知り誰かを助けられる隣人になりたと思つた。この事から、これからは隣人や隣人愛を大切にし、誰かの隣人になれるように努力していこうと思つた。

礼拝感想文

クリスマス礼拝

「ひれ伏して幼子を拝む」

日本キリスト教団

青森松原教会 牧師 半澤洋一先生

社会福祉学部 社会福祉学科

一年 長谷川夏鈴

クリスマスというものは、小さい頃から当たり前のように知つていたが、今まで特にその意味を気にした事はなかつた。もちろんクリスマスというのは、キリスト教のイベントであるという事は知つていた。しかし、特にキリスト教というものに疎

く、興味も無かつた私はクリスマスをしただ、毎年一年に一度訪れるとても楽しいイベント」程度にしかならなかつた。この弘前学院大学に入学し、宗教学の授業と週に一度の礼拝を行いキリスト教に日々触れていく中で、私の中に徐々にキリ

スト教への興味が湧いていった。

2018年12月13日に行われたクリスマス礼拝。この日聴いた賛美歌は今までの礼拝で聴いてきた賛美歌の中で一番心に残つた。暗闇の中で灯るキャンドルが幻想さを演出、礼拝堂全体に響くパイプオルガンの美しい音色にとても感動した。「きよしこの夜」や「もろびとこぞりて」は今まで何度も聴いたことのある賛美歌であつたが、この日聴いたこの賛美歌はこれまで生きてきた中で一番印象深く忘れられないものとなつた。

この日の説教は、日本キリスト教団青森松原教会の半澤洋一牧師による「ひれ伏して幼子を拝む」であつた。今まで特に気にした事もなかつた「クリスマス」という言葉の意味。この様な機会があれば多分この先「クリスマス」の言葉の意味について調べる事はなかつ

たと思う。「クリスマス」という言葉の意味は「キリストを礼拝する」という意味だと知った。今回の礼拝までクリスマスというのには、イエス・キリストの生まれた日だとももっていた。しかし、実際はイエス・キリストの誕生を祝う日でありイエス・キリストの誕生日ではないという事を初めて知った。マタイ福音書はここで「ひれ伏す」「拝む」と、二度も同じ様な意味の言葉を使っており、この部分からはキリストに対する熱い敬いの気持ちだちが込められているのだと感じた。この「クリスマス」という日は、私たちの罪を自ら背負い私たちがから罪を解放してくださったイエス様へ敬意を示す大切な日であるという事を学んだ。今まで何となくただ通り過ぎていたこの「クリスマス」という日をこれからは家族や友人など、自分にとって大切な人たちと丁寧に

過ごしていくと決めた。現在私たちの生きる社会は、とても厳しく辛いことも多くある。しかし、どんなに苦しんでどんなに逃げ出したい時でも立ち続けなければならぬ。しかし人間は、常に立ち続けるという事は難しいと思う。立ち止まって辞めてしまいたくなる事もある。その様な時には立ち止まってもいいと思う。そして、イエス・キリストの御前でひざまずく人間になろうと思った。そうするときとイエス様はまた私たちを救ってくださると信じている。また、辛い苦しい時、イエス様だけではなく自分の周りの人たちもとても頼りになると思う。私たち人間は一人ではない。人間は必ず誰かの力を借りて生きている。これまで辛く厳しい時には家族や友人から、これまで多くの励ましの言葉や勇氣、希望を与えられてきた。また、私はただ与えられ

るだけの受け身の存在ではなく、誰かに希望や勇氣を与える事のできる人間になつていきたいと思つた。

今回のクリスマスス礼拝で、「クリスマス」の意味を知り、「クリスマス」の出来事」を聞いた事は私にとつてとても貴重で良い経験となった。この日を境に今までは特に気にも留めていなかった「クリスマス」という日の素晴らしさ、大切さを知る事ができた。その他にも、パイプオルガンやハンドベルの心温まる音色や賛美歌の美しさにも改めて気付く事ができた。この礼拝で得たものを忘れず、これから先の未来も常にイエスさまを敬う気持ちを持ち続けていこうと思う。



感想文

「クリスマス音楽の夕べを聴いて」

文学部 英語・英米文学科

三年 藤田 佳奈

12月13日に行われた「クリスマス音楽の夕べ」では様々な演奏家の演奏を聴くことが出来た。最初の演奏は弘前学院大学ハンドベル・クワイアの皆さんの演奏だった。いつも礼拝での演奏を聴いていたが今回は特に素晴らしい演奏を聴くことが出来た。皆さんがそろえてハーモニを奏でていてその動きを見て懸命に練習したことが伝わってきた。また途中でハンドベルではない楽器を使つて演奏していてその音がとても美しいと感じた。調べてみると、その楽器は「ハンドチャイム」と

いう楽器でハンドベルと同じように単音で鳴らす楽器であることが分かった。ハンドベルに比べ柔らかい音がしていたのが印象的であったがハンドベルの音色の方がクリスマスらしさを感じた。パイプオルガンの演奏ではハーモニが複雑なところが多く、授業のレッスンの中でオルガンに触れてオルガンのハーモニは奥が深いなと感じていたけれど、今回の演奏を聴いて和音がちょうどよく重なるところが聴いていてすっきりする感じがした。また右手と左手の旋律が別々のところは本



当に圧倒された。次々とメロディーラインが変わっていくのに動きがスムーズで自分がオルガンを演奏する時も注意して演奏したいと感じた。

ソプラノ独唱での「ひいらぎかざろう」はクリスマスソングと一緒に歌いたいくらい好きな歌だったので工藤さんの綺麗な声で聴くことが出来て良



かった。また、「You are the one」は良く聞く曲である。フィギュアスケートの荒川静香選手がトリノオリンピックでこの楽曲を使用したことも有名である。この曲は口ルフ・ラヴランド作

曲、フィクション作家ブレンドン・グラハムが作詞を手掛けた。私はこの曲の転調するところがとても好きで、ピアノの伴奏も素晴らしいと感じた。また、ビブラートが素晴らしいと感じた。歌詞の中の「you」とは自分を支えてくれたりする存在で、その存在がいるから山のうえにも立つことが出来るし、嵐の海上を歩くことも出来るという表現が神の存在であると感ずる人もいれば、身近な人を思い浮かべるともいると感じた。ひとつの解釈だけではなく様々な解釈ができるというところが、この曲が世界中で愛される理由だと感じた。バリエーションの独唱はあまり聴く機会がなくて初めてしっかりと聞いたが、礼拝堂に声が響いて迫力のある独唱であると感じた。「子供の時間」では曲の始まりの旋律が日本らしい感じですが、新鮮に感じた。

金管五重奏では「目覚めよと呼ぶ声あり」という曲が演奏された。この曲はバツ八が作曲したカントーラで1731年に作曲された。このカントーラ140番は「コラル・カントーラ」と呼ばれるものであり三位一体節後第27日曜日福音書章句(マタイ伝第25章1-13節)では、花婿の到着を待つ花嫁のたとえを用いて、神の国の到来への備えを説く。それをふまえ、真夜中に物見らの声を先導として到着したイエスが、待ちこがれる魂との喜ばしい婚姻へと至る情景を描いている。

なお、物見の呼び声が夜のしじまを破って響く冒頭の合唱曲と、シオンの娘の喜びを歌うテノールの第4曲は特に名高くのちにオルガン用に編曲された。以前から好きで聴いていたが金管の演奏は聞いたことがなかったので貴重な演奏を聴くことができて良かった。私

は小学校と中学校でトロンボーンを演奏していたのでとても興味深く聴かせていただいた。一曲目では不安定な部分もあったがその後はハーモニーもきれいに重なっていて素晴らしい演奏を聴くことが出来た。第二部では、聴いている人を楽しませ

るような演出や聞いたことのある曲を演奏して楽しんでみながらきくことができた。このような機会があればまた参加したい。また、地域の方々もたくさん来ていたので来年以降もこのような場が設けられれば良いと感じた。

### キリスト教文学 読書感想文

#### 『氷点』『続・氷点』を読んで

文学部 日本語・日本文学科

三年 中川芽姫

『氷点』『続・氷点』の主人公・陽子を見ていて気付いたことがある。それは、どんなに大きな壁が目の前に現れたとしても人間は乗り越えることができるということだ。そして、どんな壁でも乗り越えることができるの

は陽子だけではなく、自分にも当てはまることだと気付くことも出来た。この作品を初めて読んだとき、主人公のおかれています環境の壮絶さに驚いたことを覚えている。もし、私が陽子と同じ環境にいたとしたら、耐え

られず逃げ出ししているはずである。しかし、私は陽子の環境は陽子自身が作り上げたものではなく、陽子を生んだ親や育ての辻口夫妻が起こした行動が引き起こしたものだと考える。辻口啓造は陽子を引き取る際、まるで善意で引き取ったかのように振舞っていたが、実際は部下である若い眼科医・村井靖夫と不倫していた妻・夏江に対する復讐のために引き取ったことが陽子の壁となる全ての出来事の原因と言える。育ての親になつてくれた啓造がそのような魂胆で自分を引き取ったとは知らずに、啓造や夏江、兄・徹を本当の家族だと思っている陽子が本当に不憫だし、きつと啓造も罪悪感でいっばいだっただため、陽子に対して冷たく接していたと思う。

『氷点』までは、陽子に対する夏江の執拗な嫌がらせが主に書かれていたが、そこで陽子の苦痛は終わらず、殺人者の子ではないが、自分が姦淫によつて生まれた子という新たな事実を知つてしまふ。姦淫という言葉で電子辞書で調べてみると、「男女が道義に背いた肉体的交渉をもつこと」と書かれていた。もし、私自身が望まれずに生まれたと知つたら、生きていられないと思う。

『続・氷点』では、陽子の実の母・三井恵子とその家族との話が主に書かれている。私はこの『続・氷点』の部分の恵子の夫・弥吉が慈悲深い人物だと思つた。自身が行つた中国での妊婦の腹を裂くという残酷な行為を後悔しており、出征中に妻が他の男の子を産んでいたことを知つても、嫉妬に任せて妻を責めるのではなく、一つの生命をこの世に送り出したことと感謝の思いを持つという行為は簡単にできることではない。普通なら、何故産んだのか怒り散ら

すに決まつている。しかし、弥吉は手紙の末尾にその妻の子を立派に育てて下さつてありがとうございませとも書いています。この部分から本当に慈悲深い人物なのだと理解した。

そして、事情を知るまでは実の母のことを責めていた陽子は母に対し感謝の気持ちを抱く。陽子の前に立ちほだかつた大きな壁は、もらわれた孤児だということ、殺人者の子ということ、殺人者の子ではなかつたが、姦淫によつて生まれた子ということだと言える。最終的に陽子はこの壁を乗り越え、北原邦雄と結婚することを決意する。改めて、この作品の陽子を見て、自分のこれまでの人生にも大きな壁が立ちほだかつた瞬間はあつたと気付くことができた。

そして、その壁を乗り越えることができたから今の自分があるということにも気付くことができた。

この作品を最初読んだときは、なんて辛く重い話なのだと思つたが、自分が何気なく乗り越えてき

たことを再発見させてくれる作品だと改めて思つた。

演奏会感想文

「キリスト教音楽演奏会」に参加して

文学部 日本語・日本文学科  
三年 對馬美穂

私は2018年11月8日に行われた「弘前学院大学 キリスト教音楽演奏会」に参加した。普段あまり聞くことのないキリスト教音楽に触れ、パイオルガンとソプラノの歌声に感動した。ここから「キリスト教音楽演奏会」についての感想を述べていく。

に活動しているソプラノ歌手の高橋絵里さんと、本学のパイオルガン奏者である竹佐古真希先生による演奏が行われた。ここからはそれぞれの曲についての感想を述べていく。

まず、イタリヤの作品について。1曲目の「T・メールラの「カンツォーネ」は軽やかな明るい曲で、この演奏会の幕開けにふさわしい1曲であった。礼拝堂全体に響き渡

この音楽会は、イタリヤの作品、ドイツの作品、英語圏の作品の3部構成で、仙台を拠点

るパイプオルガンの音に一瞬で心を惹かれた。2曲目はA・スカルラッティの「すみれ」という曲であった。この曲はオペラ『ピッコロとデメトリオ』のマリーオのアリアで、世俗曲である。1曲目とはまた違った雰囲気であり、怪しげな雰囲気曲であった。ソプラノ歌手の高橋絵里さんはこの曲から加わったのだが、高く響き渡る声や囁くような弱い声、またその対比に惹きつけられた。3曲目はモンテヴェルディの「主を讃えよ!」(詩編150篇より)であった。この曲はキリスト教曲で、「主をほめたたえよ」の意を表す「ハレルヤ」という語が登場する。キリスト教曲ということで神秘的な雰囲気が感じられた。また一息で細かい音を出したり、高い迫力のある声を出したりするソプラノの歌声に非常に感動した。

次に ドイツの作品

について。「この部では」・S・バッハの「いざ来ませ、異邦人の救い主よ」「アリア『開け我が心よ』」「高き天より我は来たり」、ベッデガーの「いざ来ませ、異邦人の救い主よ」が演奏された。特に印象的だったのはベッデガーの曲であった。この曲は暗い雰囲気曲で不安定さが感じられた。いきなり音が止まったり、小さくなったり、大きくなったりと、「強」と「弱」、「静」と「動」の差があり惹きつけられる曲であった。また1曲目の「J・S・バッハの『いざ来ませ、異邦人の救い主よ』は明るい雰囲気ではなく、厳かな雰囲気、低い響きのある音が印象的だった。

最後に 英語圏の作品

について。1曲目はイギリス民謡の「アメイジング・グレイス」という曲であった。この曲は聞いたことのある曲だったため楽しんで聞くことができた。ゆったりとした曲

で穏やかな気分になった。2曲目はバルディーニの「アメイジング・グレイス」によるトッカータ(オルガンソロ)であった。1曲目と比べて伴奏の音が細かくなっていたり、明るく楽しい雰囲気であったり、また違った印象を受けた。後半は盛り上がり、壮大で華やかであった。3曲目はヘツドの「ベツレヘムの小径」であった。歌詞を見ながら聴いたのだが、子どもに語りかけるような心温まる優しい音楽であった。そしてプログラム最後の曲はリドルの「神の住まいは何と美しいことか」(詩編84篇より)という曲であった。ソプラノの高く響き渡る声がとても印象的なきれいな曲だった。

そして最後にアンコール曲として「イエスはリソゴの木」という曲が演奏された。この曲はイギリス民謡のメロディをもとに作られた曲だそうだ。

ここまでそれぞれの曲についての感想を述べてきたが、この演奏会で演奏されたほとんどの曲がバロック時代の音楽であった。国や作曲者によつて音楽に違いがあるように感じた。例えばイタリアの作品は明るく華やかな雰囲気だったが、ドイツは比較的暗く低い音が印象的な曲もあった。その中で、ドイツの作品の3曲を占めたJ・S・バッハの音楽に注目し少し調べてみた。すると音楽に宗教の違いが反映されていることがわかった。バロック時代の音楽には二つの世界があった。それにはキリスト教の歴史が関係している。キリスト教は宗教改革によつて「カトリック」と「プロテスタント」に分かれた。「カトリック」は華やかなものを好む絶対王政諸国。それに対し「プロテスタント」は聖書に権威を置き、神に対し控えめで敬虔な市民主導の国。

音楽もこれに対応して、「カトリック」の音楽は華やかなものが多く、「プロテスタント」の音楽は厳格なリズムで控えめなものが多い。J・S・バッハは「プロテスタント」の出身である。当時は評価されなかったが、今となっては高く評価される音楽界に多大な影響を与える敬虔な宗教音楽を数多く作り出した。今回演奏会で実際にJ・S・バッハの音楽を聞き、他の国の音楽との違いを感じた。さらに調べたことによつて、同じ時代の音楽であっても国や宗教によつて違いがあることをよく理解することができた。

今回の演奏会を通して、キリスト教の音楽を聞くことができ非常に良い経験となった。竹佐古先生の絵里さんの歌声には大変心を動かされた。また、音楽によつて心が和んだり、神聖さを感じたりと



キリスト教音楽を味わい 理解することができた。

### みことばエッセイ

## 「謙虚さを忘れない生き方」

看護学部 看護学科

二年 三上浩海

私は人として重要だと思っていることの一つに「謙虚であること」がある。謙虚の意味を調べると、「控えめで、慎ましいこと。へりくだって、素直に相手の意見などを受け入れること。自分の能力・地位などにおごることなく、素直な態度で人に接するさま。」とある。もし人類がみんな謙虚でいることができれば、人間関係はとて良好なものとなるだろう。そのことをたくさんの方はわかっているはずだ。しかし、どのような立場になっても謙虚でいることは難しい。人間は成功したり、立場が上になっていくほ

ど自分はずい存在なのだ、偉いのだと勘違いをしてしまう生き物であるからだ。  
旧約聖書歴代誌下では、16歳でイスラエルの王となったウジヤ王について書かれている。歴代誌下26章15〜16節「彼はまたエルサレムで技術者により考案された装置を造り、塔や城壁の角の上に置いて、矢や大きな石を放てるようにした。ウジヤは神の驚くべき助けを得て、勢力あるものとなり、その名声は遠くにまで及んだ。ところが、彼は勢力を増すとともに思いがつて墮落し、自分の神、主に背いた。彼は主の神殿

に入り、香の祭壇の上で香をたこうとした。」ウジヤ王は16歳と言う若い年齢で王という大きな責任を委ねられた。ウジヤ王は最初は経験も知識もないからと謙虚さを持って王としての務めを果たしたに違いない。ウジヤは16歳で王位に就き、52年間国を治めた。若くして王位に就き、長きにわたり政権を担うことができたのは26章4節にあるように、「主の目にかなうことを行なった」からであろう。しかし、彼は勢力が増すとともに墮落する。祭司にのみ許されている香をたく役割を行おうとしたのである。ウジヤ王は、祭司が止めたのにも関わらずそれに逆上した。その結果ウジヤ王はその場で神に打たれて、ハンセン病にかかり、その結果死ぬまで離れ殿に隔離されてしまったのである。ハンセン病という重い皮膚病は王というシンボリックな役割に合

わない非常に重い罰であると受け止めた。  
さて、このウジヤ王の姿は私達に全く関係がない話ではない。だんだんと謙虚さを忘れてしまうことは誰にでもある。私は大学1年生の夏からアルバイトを始めた。最初は慣れない仕事で先輩にたくさん迷惑をかけている自覚があり、私はとても謙虚にしていたと思う。自分から率先して仕事をしていた。そこから、仕事を覚え、できることが増えていき、先輩がたくさん入ってくるようになっていくようになった頃から私は少しずつ昔ほどの謙虚さを忘れていった。面倒な仕事を「先輩が率先してやるものだ、自分も昔は先輩に代わってやっていたから」と、それとなく任せるようになってしまったのである。ウジヤ王の話と出会って、アルバイト先で指導する立場になった今、このような有様でいいのだろうか」と反省させられた。ア

ルバイトに限ったことではなく、人に尊敬される人、成長していく人は謙虚さを持つ人である。日本には、「初心忘るべからず」ということわざがあるが、まさにその通りである。  
ウジヤ王は自分一人の力で成功したのではない。「神の驚くべき助け」を得て成功したのである。ここでの「神の驚くべき助け」を私の話に置き換えると、私に仕事を根気よく教えてくれた先輩の姿が思い浮かぶ。先輩がここまで面倒をみてくれたおかげで仕事を覚え、先輩がたくさん話しかけてきてくれたおかげでアルバイト先で打ち解けることができた。辞めたいと思っても続けて、今の立場があるのは先輩がいたからである。支えてくれる人がいないのでは到底なし得ないことである。  
人間は成功したり、高い地位に登り詰めると、人から受けた恩を忘れて、

自分はすごいのだとおこり高ぶってしまう。高慢さは様々な面で破滅を呼ぶものだ。私にもこの先また、そのようになってしまふ時がくるかもしれない。そうならないよう、定期的に自分を見つめる時間を作り、人への感謝を忘れないようにしたい。

### 二〇一九年度 行事予定

- ・一年生リトリート  
4月5日(金) 6日(土) 南田温泉ホテルアップルランド
- ・入学記念礼拝  
4月11日(木) 10時20分
- ・学生宗教委員研修会  
4月13日(土) 12時00分
- ・三年生リトリート  
5月30日(木) 11時00分
- ・創立記念礼拝

### 二〇一九年度 主題と主題聖句

主題 「自分の前に敷かれた  
大路を進む」

#### 主題聖句

互いに押し合うことなく、自分の前に敷かれた大路を進む。たとえ投げ槍の間に突進しても、ひるむことはない。

(ヨエル書2章8節)

6月20日(木) 9時00分

#### 教職員研修会

10時15分

#### 秋の特別礼拝

11月7日(木) 10時30分

#### クリスマス礼拝

12月12日(木) 16時00分

#### 音楽の夕べ

18時30分

#### 卒業記念礼拝

3月13日(金) 10時00分

### 編集後記

ドイツの詩人ゲーテは「涙とともにパンを食べた者でなければ、人生の本当の味はわからない」と言いました。これは私が好きな格言の一つです。人生にはすべて終わりがあります。その歩む道のりには、良い時もあるれば、逆境の時もあります。順境な時よりも逆境の時に、人は多くの大切なことに

気づき、多くのことを学びます。勿論、順境な時もあり、有意義なものです。逆境の時も人生にとつて有意義なものです。順境だけの人生であるならば、または、逆境だけの人生であるならば、人生の本当の味はわからないでしょう。この「たてごと」の寄稿文の中には、寄稿者の人生の経験や考えが描かれていきます。その寄稿者の経験や考えが、読者に何か大切なことを気づかせてくれるでしょう。それだけでも「たてごと」を発行する大きな価値があると信じます。

(編集長 楊尚眞)

(坂井 任) この「たてごと」には、学生たちが様々なキリスト教行事における感想を載せてきています。その内容は、非常に率直な内容で、とても考えさせられるものです。このように思いに触れながら、皆様の手元に、「たてごと」をお送りできることを幸いに存じます。

(柘植秀通)

本年の中で、看護系大学のキリスト教育の会議に参加する機会を頂いた。私の看護師としての生死の経験は、キリスト教の「愛」の精神に通ずるものがあると聞き、今後、実習等を通して、学生にも多角的な面からキリスト教看護教育を教えられれば幸いである。

(村岡祐介)

3月は別れと希望が入り乱れる季節、大学を去られる皆様の前途に神様の祝福が豊かにありますよう祈ります。

(大坊幹子)